

研究ノート

ルドルフ・シュタイナーの 神話・寓話観から

山川淳生 博士課程前期 1年

ルドルフ・シュタイナーの神話・伝説・メルヘン観は、そのシュタイナー自身の独特な、人間と世界の進化に関する歴史観を基にしている。その歴史観のなかで特徴的なのは、時代による人間の「認識」「意識」のあり方の違いを重視していることである。

特に「認識」「意識」は「記憶」とも結びつく。シュタイナーが言うには、古代の人々と現代の人々は「記憶」のあり方が違う。古代の人々は記憶が「場所」に依存しているのに対し、現代の人々は記憶が「自分の中」に依存しているのである。古代の記憶のあり方、「思い出す」という行為が場所と結びつく、という事は現代にもないわけではない。ある場所に行ってはじめて思い出す「記憶」というものもある。古代人は記憶の多くをそこに依存していたというのだ。それに対し現代に特徴的なのがいわゆる「頭の中」に記憶が有るというイメージである。

また、古代人の「場所の記憶」というものは現代の「そこに行って、思い出す」という事とは少し違う側面もある。つまり、自分が体験した事でない記憶もまた場所に行くことで「思い出す」ことできるというのである。シュタイナーが言うには、その「記憶」の方法が存在した時代には、歴史を残すという必要性もなかったという。なぜならばそこに行くことで歴史を「思い出せる」からである。また、文字というものの発生もまたそこに絡んでくる。歴史を残すため、言葉を「残す」という必要性の為に文字が生まれたというのである。

ゆえにその記憶の方法の転換点こそが、神話・伝説・メルヘンの起源ともいえるのである。シュタイナーは神話・伝説・メルヘンを抽象的な「象徴」として歴史のなかに組み込んでいる。

古代の人々は、秘儀参入における意識体験を重要視していた。現代的な概念でいえば、「啓示」と言われるものが生活のうちに組み込まれていたといえる。その「啓示」を受ける事ができる者は、全ての人間ではなく限られた人間であり、秘儀参入による意識の形態の変化によってそれを受けることが可能になった。そしてそのような意識のありようが異なる人々が「指導者」となるのである。神話・伝説・メルヘンは秘儀の名残のようなものであるとも考えられる。それらは、物語それ自体に秘儀と意識変容の

「歴史」と、秘儀というもののありようの名残が含まれている。恐らく、そのときは歴史という考えもまた、発展の途上にあったのだろう。今日では、歴史という方法は確立されているが、現代の歴史という概念は、記憶のありようが古代から現代のそれへと完全に変容した状態と言える。いわば、神話・伝説・メルヘンのありようは古代の歴史のあり方とも言えるのである。現代は歴史に（究極的な実証性はともかく）論理性、合理性を求められる。それはある意味現代の記憶が「自分の内部」に依存するからこそ可能な形態といえる。他の現代の諸学問もまた同様である。古代の記憶が、シュタイナーの言うように場所に依存する記憶、つまり「自分の外部」に依存する記憶であるからこそ、歴史は神話・伝説・メルヘンの形態をとっている。つまり、神話・伝説・メルヘンの、現代的観点から見た場合の非現実性、抽象性はある種の古代の意識のあり方とも言える。

・「眠り」について

シュタイナーは講演録、メルヘン論のなかで、人間の「眠り」を「植物の状態」に例えている。ある意味では、植物が生きている感覚とは、眠りのような感覚だ、と捉えて納得することもできる。眠っているものの周りに何らかの植物のたぐいのものが覆っている、などといった「眠り」というものに象徴として植物が伴うメルヘンも存在する。

植物というものの意識状態と、人間の眠りの意識状態が似通っていると想像してみれば、確かに人が「眠り」に状態にある時の「外からの干渉」に対する反応は植物の「外からの干渉」に対する反応に似ているかもしれない。起きることのない眠りにあるが、生きている人を想像してみると、（しかしながらいわず何をしてしても無反応で、処置によりただ生命活動が維持された「植物状態」といわれるものではない。健康な人間が「眠り」にある状態から、「起きる」という行為を抜き去ったものを想像するのである）植物のあり方にどこか似ている。生命維持・生命活動の方法などはまるで違うが、その無防備さ、及び静止状態に有るが全く動かない「物」ではない感覚、そういった反応のあり方に「植物」と「眠り」のあいだの

似たものを感じるとることができる。

また、人間のうちにも、「眠り」の状態以外において「眠り」的な意識状態を想像することができる。人間の幼少期の意識状態のあり方は「眠り」及びそこで生じる「夢」というもののあり方に似ていると思われる。

幼少期の記憶のあり方とはいかなるものか。これは、個人差なども多く有るかもしれないが、普通は幼少期の頃の記憶は無かったり、ものすごく断片的であったりするはずである。けれども心に深く残った出来事は、幼少期の記憶であろうと、あるいはその頃の記憶であるからこそ、いつまでも残り続けているだろう。

この幼少期の記憶のあり方は「眠り」と「夢」の記憶のあり方に似ているかもしれない。勿論、夢というものは、合理的には、と言って良いのか、ある種の懐疑論のようなものかもしれないが、醒める事があるからこそ夢なのである。夢を見ているときに、これは夢であると思うということは、決して無いわけではないが、普通な事とは言えない。また、夢のなかで夢であると感じたとしても、果たしてそれがすなわち「目が覚める」ということになるわけではない。「眠り」というものも気がついたら眠っている（またそのような経験を「語る」には眠ったあと、目が覚めなければ「私は眠っていた」と「語る」事ができないが）のであり、人が自分の手を自分で動かすように眠るという行為を行うというよりは眠りは向こうからやってくるのを待つ（あるいは待つと意識することなくやってくるかもしれない）のである。それと同じように、「目が覚める」のもある程度向こうからやってくるものなのである。夢、あるいは意識のない状態のなかで「さあ起きるぞ」と言って起きるだろうか。（意識が無いのに、なぜ「さあ起きるぞ」という意識があるのか。）夢のなかで何か目が醒めてしまうような強烈な出来事が発生（再生？）して、意図せずして醒めてしまうことはあるが、「さあ起きるぞ」といって夢から醒めるのもこれもまた普通な事とは言えない。

このなかで幼少期と夢との共通点はまず「夢から醒める」ことで夢を認

識するように、「幼少期を脱した状態」があるからこそ幼少期を認識することができるということである。

次に夢というものの形態にも何処か幼少期とは共通点を持っている。まず記憶というもののあり方それ自体である。幼少期の記憶は断片的であり、場合によっては時間感覚が弱く、おかしな時間系列を持っているかもしれない。

また何よりも、夢というものは醒めてから「忘れる」事が多い。厳密には、基本的に夢を覚えているとしたらそれは目が覚める直前まで見ていた一連の夢を覚えているというのである。眠っている間に、それよりも多くの夢を見ては忘れる事を繰り返して、夢とはその再生途中に「目が覚める」という横やりが入った際に「覚えている」という事ができる。

幼少期も、その幼少期である間は記憶を受け、忘れを繰り返し、幼少期からその後への「意識の変革」という言わば夢という「目が覚める」の横やりから先は、少しずつ忘れていくのだ。(決して、貴方の幼少期が幻・夢であったというわけではない)

逆に言えば、今まで散々言って来た、個人差が大きいであろう「幼少期」というものがいつからいつまでをさすのか、という問いがあるとしたら、ここでは、生まれてからその夢に似た記憶・意識状態を持っていた期間、ということにしても良い。

また、その幼少期と夢の「意識」のあり方のもうひとつの共通点は、そこで生じる「感情」の感覚である。夢のなかでは、現実においてはおかしな「感情の関係性」を持っていることがある。目が覚めている状態で、冷静にあるいは合理的に常識的に考えればある「もの」からある「感情」が導き出されるような事が無いような「もの」と「感情」の関係性が存在することがある。たとえば、現実で見ても全く怖くないようなものが、夢に出て来た時理由もなく怖いときがある。どちらかといえば、「怖いもの」を見ているというよりも、「怖い」という感情をただ発生させているだけ、とでも言うような。

その感情の脈略のなさはある意味最も純粋なその感情なのである。「怖

い」という感情から合理性と常識の関係性が失われた純粋な状態である。勿論、「怖い」という感情に限ったことではない。夢にはそのような常識の因果関係をこえた「感情」が存在するが、幼少期にもそれに近いものは存在したのかもしれない。

常識の因果関係というフィルタは、感情の抑制を促すのである。つまり、「論理」によってものごとの認識方法を変えるのである。幼少期を抜ける際の意識変容の要素のひとつであると言える。幼少期の感情が強く感じられるとしたら、より純粋であり、それはつまり非常識的で非論理的なのだ。そのなかに「常識」があるとしたら、いわゆる一般的な意味の「常識」というよりはそれは遺伝子の持つ情報、本能、あるいは環境に対する反応のようなものかもしれない。

メルヘンにおいて、「眠り」にある者は何らかの方法で「目をさまさせられる」事が多い。だいたいにおいてそれは外側からの干渉である。何らかの条件を達成した外側の人間、「目が覚めている人間」が眠っている者を眠りから「目が覚めた状態」にもっていく。

幼少期・夢に似た世界である眠りから、「目が覚めた状態」という意識状態の世界へと導かれているのである。要は、幼少期の意識から幼少期を抜けた心理への移行を象徴している。メルヘンを、シュタイナー的な意識の歴史による変容の概念で解釈するとそのように意味をとることができる。意識の変容を進化史観から見ると、より古い人間のありようが幼少期・夢的な意識であり、そこから「目が覚めた状態」、いわば現代の幼少期を抜け出した人間にとっては当たり前意識状態へと意識が進化、あるいは進化という言葉のなかの価値観を抜きにすれば「変容」したのである。

その変容がいかにして行われたか、生じたか、はシュタイナーの歴史観に添えば、「秘儀」「奇蹟」によってである。言わばある種の（シュタイナー的に言えば、人間とその周囲の世界における進化・変容に作用する人間の外側の力による）受動的な変容なのだ。

そこで幼少期・夢の意識状態を抜けた人々があられ、その意識状態へ

と皆を「上らせる」手助けをする。その出来事の象徴・伝承として神話やメルヘンが存在する。

また眠りというものは、時に「死」とも関連づけられる。ギリシア神話においてヒュプノス（眠り）とタナトス（死）が兄弟であるということなどもそうである。生物学的には、眠りは体の休息であり、夢は記憶の整理という役割を持っている。

また人間の体の器官のうちには、「眠り」を「死」と誤解する器官も存在する。生殖器官のたぐいは、勿論個人差・性差は十分にあるだろうが、「眠り」を「死」とであると認識して、「眠り」に近づく頃に活動が盛んになる。人が、「夜」と「性的なもの」「性的行為」を結びつけるのは、他の理由も多くあるが、そのような理由からというのものもあるだろう。言うなれば、生物学的には眠りと（生と）死の関連性は、人間の生理のうちにも存在するのだ。

ただ、天国、地獄、浄土など、現代の宗教のなかで大きな勢力をもつものの多くが持っている「死後の世界」及びそれに伴う「死後の救済」といった概念はここまでで述べた「眠り」と「死」の関連とは正反対のものと言える。死後も「世界」「救済」といった意識活動、感覚を通して得られる「世界」という構造があるならば、それはいわゆる「眠り」とは非常にかげはなれたものなのである。眠りによって死を迎えるどころか、新しい生（死後の世界という名の「生きること」）を迎えている。

ただ、そこにシュタイナーの考える「秘儀」的な要素が無いわけではない。逆に、それらの「死後の世界」の世界観は、人間の「生」を「眠り」として「死・死後」を「目覚め」とするという世界観ともいえる。「生」という「眠り」のなかにある者を、その宗教独自の方法によって、「死の世界」で「目覚め」を起こさせるのである。その宗教の方法とは、信仰であり、信仰の為の儀式、行為である。その行いをした者は、死後、あるいはその来るべき時に救われる。むしろその死後の来たるべき時が「目覚め」であり「意識の変容」とも考えられる。

ただ多くのそのような宗教は、善悪という価値観を重視しているので、意識という問題にはあまりかわりがない。逆に言えばそれは「大衆性」を持つ宗教の宿命ともいえる。「意識」や「目覚め」と言っても（現代においては非常に怪しい言葉でもあるが）多くのひとに伝わる言葉ではない。しかしながらそれは「伝播」のうちに見られる現象かもしれない。仏教が最も分かりやすいが、哲学的な観念は宗教のなかで修行的な側面、（あるいは神との関わりのなかで）つまり「意識」であるとか「目覚め」そのものを重視するものには多く見られるが、それと同じ宗教でありながらその側面が弱いものは「天国」「救済」「浄土」のような世界観を大切にしている。

概念的で感覚的、それでいて論理を持つような事柄を全てのひとに分かりやすく説明する為に、善悪の価値観は最も有効だということだ。そして何よりも、「寓話」として語る事で、興味を引き、かつ分かりやすくなる。

というのは、割とよく見かける「寓話」というものの存在意義、あるいはその持つ効果・役割に関する説明かもしれない。キリスト教の新約聖書においてイエス・キリストが何故「たとえ話」を多く用いるかという事においても、「たとえ話」を用いて、観念的で「そのままの言葉では理解がしがたい」ものごと・概念を説明することでわかりやすくなるからであると言われることがある。シュタイナーの考えは、「寓話」というものに関してはそのような効果的に用いられる方法というよりも、「寓話」としてものごとを説明する事こそが人間の本質（あるいは、少なくとも古代の人間の本質）であるとも解釈できる。少なくとも古代の人間がいわば現代における論理・合理・人間学的なものに対しては、抽象・象徴という寓話的方法において表現をしていた。逆に言えば、寓話に対して先述の「効果」として意見を述べるという客観的な態度は「現代の意識状態」のあり方がなすわざであるといえるだろう。

・全体と個別

シュタイナーは、基本的にはメルヘンや神話といったものに「人間の本质・性質」を見いだす。それは実証や合理性を重視する「科学的観点」ではないが、非合理的な「無意識」「集合的無意識」のようなものとは近いものを持っている。神話は人間の性質を「抽象的に」「非合理的に」写しだす鏡のようなものともとれるのである。ゆえに、神話には人間という存在のもつ特質などが強く反映されるのである。現代と古代では、世界に対する認識の方法の差異はあれども、いくつかの体の条件は共通していたはずである。シュタイナーは、既に何度か述べたかもしれないが、それに対し「意識」のありように大きな違いが存在すると言うのである。そしてその時代固有の「意識」の変化を促す力があると述べる。その変化を、例えば月の時代、などと主に「星」と関連づける事が多い為、西洋占星術的なものと共通するような世界観を持っている。

シュタイナーの言う、古代という時代に外側から作用した「もの」は表現手段として抽象的な寓話という方法を人間にとらせ、現代においては表現手段として客観性という方法を人間にとらせているのだと言える。

またシュタイナーはそのような外側から人間に作用する力、ある意味では「霊性の世界」と言われるものにおいて、その力の表象としてのメルヘンが残る場所として、東洋を挙げている。

「論理性」と「抽象性」としてのシュタイナー的歴史区分におけるそれらふたつの違う象徴について考えた時、それらふたつの関係性が非常に特徴的な寓話として、東洋、古代中国の著書、現代でいう「莊子」のなかにおける「渾沌」の話が挙げられる。

「渾沌」、つまり混沌に七つの穴を開けたところ、渾沌は死んでしまったという話である。渾沌には、人間が持つ五感を意味する「七つの穴」持っていなかったため、それを与えてあげようと考えて与えたところ、渾沌は死んでしまった。莊子という書物が、そのなかのいくつかが著者の莊子本人のものであるか、あるいはその後世の時代に書かれたものであるか、そも

そも莊子が厳密に言っている頃の人間であったか、などがはっきりとしたものではないが、シュタイナー的な思想・世界解釈を持ってその話の筋を象徴として見れば、これこそシュタイナーの言う古代と現代、抽象的世界と論理的世界の分かれ目と言える。

古代と現代との分かれ目のうちには、まず何人かの人間が「現代的な意識」（いままで述べたなかでは「幼少期を抜けた意識」と述べたが）を得て、まだ「現代的な意識」へとたどり着いていない人々を「現代的な意識」へと導く手助けをするという事が行われたという。シュタイナーがその事を述べる際の歴史的な事柄、あるいは寓話として現代に残るものは主に、ギルガメッシュ叙事詩の、エレウシスの秘儀に代表されるギリシアの秘儀など、今の「西洋」の礎となった世界におけるものを述べている。特にギリシア神話は、先述の「世界・人間の意識の状態へ影響を及ぼす外側からの力（＝シュタイナーの言う霊性）」の象徴であり、その神々の持つ性質は、地上の人間や世界環境に対する影響を表し、神々が世界の周囲に「存在」したり、しなくなったりすることが世界及び人間に影響を及ぼすと解釈している。

特に、先述の「外側からの力」を与える「もの」を擬人化（少し違和感のある言葉だが）解釈したのがギリシア神話の神々であり、シュタイナーは特にディオニュソス、デメテル、エロス、ペルセポネなどの神の特質に着目している。人間の古代から現代への意識の変容を象徴する要素を持つ神としてヘラを挙げている。ヘラはゼウスの妻であり、「嫉妬深さ」において象徴的な女神である。この「嫉妬」という概念が、古代と現代の意識状態における違いだとシュタイナーは言う。嫉妬というものは、基本的に「自分」と「他人」が存在しなければ成立しない。古代の人々は「人間は皆同じ」という共有制を持っていたという。人間という集団でひとつという考え方といってもかまわないだろう。私たちは皆同じ者なのだから、他人つまり自分に嫉妬する意味なんてないのである。「記憶」が場所に依存しているという事にもそれは関連を持っている。場所に記憶があるのだから、記憶は皆で自然と共有できて当然なのだ。ある意味「集合的無意識」

の究極系とも言うべきか。そこから「個別」という意識・思想へと変容していった。「他人」が存在するには「皆が同じ」ではいけないのである。シュタイナーはギリシア神話において、その「全体」から「個別」への意識変化の象徴として、シュタイナーにとって「全体としての人間」を表すディオニュソスがヘラにたぶらかされたティタン族によって八つ裂きにされたギリシア神話のなかの話を挙げている。そこに関連するのは民族が別々に別れて行くディアスポラであり、また旧約聖書におけるバベルの塔の出来事とも関連させている。人間が個別となった要因としてその「言語」が個別にわかれて行くことをも象徴させている。

その「個別化」というのはたらきが起る前の言語が「場所に依存した記憶」のそれがあるように、「全体としての」人間同士で言語を共有することは容易だったのである。

これらの「意識の変容」は「進化」と見ることも「退化」と見ることもできる。秘儀で行ったように、「意識をより上のステップへと導く」為の進化であったという事もあれば、バベルの塔の寓話のように罰としての「退化」ととれる寓話もある。前述の「莊子」においても、その構図はまさに変容した意識を持つものが、まだ意識を変容していない者（渾沌）を見て、新しい意識へと導くという構図である。老莊思想というものは、基本的に「全体としての人間」の色が強い思想と言える。「胡蝶の夢」など、人間同士ではないがまさにその世界観と言えるかもしれない。世間を離れるという「隠者」性は、「全体でなくなった人間」たちのコミュニティから抜け出し、「全体」に帰りたいという意味も秘めていると解釈できる。「渾沌」が意識の高みにのぼったために「全体でなくなった人間」（シュタイナーは、メソポタミア・ギリシアなどの現代の西洋の起源におけるそれらの人々を「指導者」とも呼んだ）によって意識の高みにのぼらされたために、「渾沌」つまり「全体」そのものがなくなってしまったのである。

それに対して、同じ東洋において、例えば仏教のなかの、小乗仏教、空の思想や唯識の世界は、「個別性」を非常に重視した世界と言える。言うなれば小乗仏教はそれこそ「意識の変容」をひたすら目指す宗教、あるい

は思想体系である。「意識の変容」といってもそれが「進化」であるか「退化」であるかについては思想によって全くそれぞれであるが、少なくとも小乗仏教の意識の「高み」の場所は恐らく、この「全体」から「個別」へと変容したそれに基づくのならば、その変容と同じベクトルに進むことであるはずだが、恐らくそれもまた、厳密には「修行を目的としている」仏教に限るとしても宗派によって違うと言わざるを得ないだろう。果たしてサンスクリットから中国語、そして日本語の音へと翻訳された仏典のなかにサンスクリットの「意味」は残っているはずはないのだが、その「音」だけの世界をひとは唱える。ここには、少々「全体」であった世界の名残と解釈してしまえそうなところもある。また広い意味での「瞑想」という行為もまた、精神の集中によってかつての、人間が本来持っていたはずの「全体」性を想起したいとでも言うような様子である。

ただそのなかでも「唯識論」はまさにその思想そのものについてならば「個別」の世界と言えるだろう。唯識論は、簡単に言ってしまうと「懐疑論」である。デカルトの「我思う、故に我あり」と、背景・目的・根底等は全く違うが方法だけは共通する。「自分」以外の存在について、知覚することのできないものの存在は「ないかもしれない」と言えるのだ。仏教には、もともと「縁起」という思想があるが、それを「我」について発展させたものともいえる。「我」以外は疑いえるものであるとは発想の道筋が逆かもしれないが、「ものごと」は「我」に知覚されるからこそ、存在するのだということだが、裏返しにしてしまえば、同じである。「懐疑論」は「個別」による（新しい、と言ってしまうのかどうか）思想体系であると言える。

・記録と発展史観

シュタイナーはメルヘン・神話・伝説などを、現代文学や芸術の感覚と同じタイプの「創作」というよりは、歴史のなかにおける人間の意識状態の変容にまつわる抽象的な「記録」とであると話している。しかしながら、

記憶のあり方がメルヘンの発祥の時代と現代とでは違うという観点に基づき、そもそも「記録」という考え方が全く違うのである。「集合的無意識」のようなものが人間の奥底に潜んだままではなく、むしろ奥底から時折流れ出して人間「たち」に干渉し、影響を与えたような時代に、人々は場所によって記憶を共有するようにある程度の「意識」「無意識」（どちらも、今とは全くあり方、領域範囲が違うと思われる）も共有していたというのである。「記録」とは、経験の共有である。体験を文字に翻訳し、文字を見た相手に体験を想像させる。ゆえに、完全な、「感覚的な」体験の共有は不可能である。（そういう独我論は言い出せばきりはないが。）ただそこにシュタイナーの言うようにまるで「集合的無意識」のようなものが干渉し、流れ出しているような状態であるならば、「記録」とは、むしろその「集合的無意識」が流れ出すという事をその聞き手・読み手（あまりにも古い時代であるならばそもそも読み手というものがありませんかもしれないが）に促進する為の「記録」であるといえる。いわば「場所に依存する記憶」のように、想起の為の記録なのである。

メルヘンは聞き手あるいは読み手の、シュタイナー的な言葉で言えば「魂」に干渉をするというのである。つまり、人間は本質的な部分においてメルヘン的なものを「魂の乾きを潤す為に」欲しているというのである。それは現代の人間も変わらないという。恐らく、シュタイナーの「未来についての思想」ともいえる芸術論、教育論の根底をなす思想のひとつであると考えられる。

メルヘンを創作・ファンタジーと見なす事にシュタイナーは基本的に賛同しないと述べている。しかし、それは決して「創造性」を否定するわけではない。この「魂の乾きを潤すメルヘン」という思想は、現代的な考え方で解釈すればメルヘンのその創造性のようなものが人間の魂には必要であり、富となると考えることもできるが同時に、シュタイナーの古代についての考え方も基にすれば、メルヘンの持つ創造性や抽象性は、感覚的な事柄を共有する為の手段であり、「渾沌」の話ではないが感覚的なものを厳格で機械的な論理で話すことでその感覚が壊れているという事であり、

感覚を、同じ抽象的な物語という感覚的なやり方で話すという事に価値を置いているということともいえる。

シュタイナーの「人間の進歩」という感覚は、果たして「発展史観」なのだろうか。人間の意識の発展であるとか、古代から現代への歴史観を見ると、シュタイナーの思想には「人間の発展」という概念がひとつの根幹をなしていることが分かる。しかしいわゆる西洋近代にみられるような「発展史観」は、シュタイナーにとって強い批判の対象である。無神論、有神論、唯物論にも様々な立場があるが、19世紀後半から20世紀の始まりにかけてを生きたシュタイナーは、いわゆる「物質主義」からこのような古代の意識感覚に基づくメルヘン、その感覚という人間の持つ様相を重視した世界を望み（望んだというほど強い言い方はできないかもしれないが）世界は再び「物質主義」から古代の意識に似た無意識の、シュタイナーの用語で言えば「霊性」が気づかれる時代になるだろうと言った。元来、客観的な立場に立てばそれらの物質・抽象・共有性のようなものの世界の外からの力による「変容」はそれ自体では価値を持っていないが、シュタイナーはそれら人間の（その時代固有のものではあるが）メルヘンの根源の機能をもつ人間の「感覚的世界」を中軸とした「発展史観」を持っていると言えるかもしれない。

・内と外

世界に作用する力が、人間の意識のあり方を（現代の意味で言う「無意識」に作用するように）定めるならば、その時代の意識はある程度操作されていて、つまり究極的な「客観性」は得られない、ということになる。そもそも客観的・論理的であること自体が「時代の意識のあり方」であり、「客観性」が他のあり方よりも上位であるけれども、それは単に時代の意識のあり方で、かつて古代に「集合的無意識」のような共有性が当たり前の意識を与えられていたのが、「客観性」及び論理性・合理性が主流と考える意識を与えられている、と変わっただけである、と考え「客観性」もまた時代の特徴であるならば、客観性であるべきそれ自体が主観的なイド

ラであるのでは、(客観性を客観的に考えるというのもまたそうであるが) というような領域に迷い込むが、いずれにせよ常に世界は「何らかの偏見(あるいはそれは思考という行為それ自体)」を被せられながらものを考えたりする運命と言える。

シュタイナーは物質性の意識状態の次にまた別の意識状態の作用が行われると話し、丁度シュタイナーの時代がその区分にあたると言った。世界は常に「何か」を通してみなければならない。世界本来の姿があるとしても、人間は「五感」を通してものを見る。「五感」にも隙間が多く有り、無意識というものは恐らくそこを通過して人間に作用する。もしも「世界」に作用する力があるのならば、そこを通過して作用するだろう。

また「五感」を通す限りものごと「本来」の姿は見えないとも言える。果たして知覚できないものは「存在」するといえるのか? シュレーディングアの猫の生死は、「知覚」なしに知り得ない。本質的に人間の「外」に世界はあるが、五感という知覚を通してみた風景はある意味人間の「中」つまり脳に存在している。では世界とは人間の中に有るのか?

シュタイナーは現代の意味での眠りを自分の「外の世界」に魂がある状態と言った。丁度意識を持って起きているとき自分の「内の世界」に魂があるように。いわばシュタイナーの論理は基本的には「内」と「外」が無ければ成立しないのだが、「霊性」や「意識」にまつわる話はある意味なんとでも解釈はできる。相対的な「世界」本来が存在し、何らかのフィルタを通して知覚したものが人間にとっての「世界」だ。そのフィルタに何らかの緻密な化学現象であっても良いので、変化があるとしたら、運命論よりよっぽど弱いコントロールに影響された「存在」とは時に常識を超えている。非常識も一般化すると常識になってしまう。

参考文献

Kurt Ranke, Enzyklopädie des Märchens, Walter de Gruyter Berlin/NewYork, 1977

「神々との出会い (シュタイナーコレクション4)」著:シュタイナー, ルドルフ 訳:高橋巖 筑摩書房 2003年

- 「歴史を生きる（シュタイナーコレクション6）」著：シュタイナー，ルドルフ
訳：高橋巖 筑摩書房 2004年
- 「メルヘン論」著：シュタイナー，ルドルフ 訳：高橋弘子 水声社 1990年
- 「西洋の光のなかの東洋」著：シュタイナー，ルドルフ 訳：西川隆範 水声社 1992年
- 「星と人間—精神科学と天体」著：シュタイナー，ルドルフ 訳：西川隆範 風濤社 2001年